



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Bert Meister, Sie sollen brunderschaftt halden. Religiöses Engagement in den genossenschaftlichen Vereinigungen (Bruderschaften, Zünfte, Gesellenvereinigungen) der Stadt Altenburg im Spätmittelalter, (Schriften der Rudolf-Kötzachke-Gesellschaft; 7) Leipzig 2001, 206S.
Author(s)	鍵和田, 賢
Citation	西洋史論集, 8, 59-71
Issue Date	2005-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37462
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_59-71.pdf



Bert Meister, *Sie sollen bruderschaft halten. Religiöses Engagement in den genossenschaftlichen Vereinigungen (Bruderschaften, Zünfte, Gesellenvereinigungen) der Stadt Akenburg im Spätmittelalter*, (Schriften der Rudolf-Kötzschke-Gesellschaft; 7) Leipzig 2001, 206S.

鍵和田 賢

はじめに

現在のドイツの仲間団体研究における焦点の一つとして、中世のさまざまな仲間団体を包括的に定義することができるか、という問題をあげることができる。よく知られているように、中世においては、ツンフト、商人ギルド、宗教兄弟団などさまざまな仲間団体が存在していた。それらの間の類似性に着目し、各種の仲間団体を一つの包括的概念の下で理解するべきか、あるいはその形態や活動内容の差異に着目し、それらを個別的に理解するべきかという問題である。こうした問題は一九七〇年代以降、これまで仲間団体研究において主流だった、個別的な団体理解に対するアンチテーゼとして、包括的な団体理解が提唱されたことに端を発している。しかし、この包括的な団体理解そ

のものは、そもそも仲間団体研究が本格的に始まった一九世紀半ばから主張されていた。すなわち、ドイツにおける仲間団体の体系的研究に初めて取り組んだヴィルダは、中世の仲間団体全てを包摂する概念として「ギルド」を設定し、包括的団体理解を提唱した。^① ギールケもまた、仲間団体を包括的に理解しようとした。^② 特にヴィルダは、多様な各種仲間団体を包括的に理解する際に、それらに共通する要素として、宗教的要素を重視したのだった。しかし、ヴィルダやギールケの後の仲間団体研究においては、仲間団体を個別に研究する傾向が強まり、包括的な仲間団体研究は一時衰えることになった。その傾向の背景としては、一九世紀後半の労働組合の発展による、仲間団体の経済的機能への関心の高まりがあげられる。個別的な研究の中心になったのはツンフトであり、ペロウやコイトゲンなどは、ツンフトの経済的機能を重視し、ヴィルダが仲間団体に共通する要素として重視した宗教的要素を、その付随的現象と理解し、都市当局に対してツンフトの無害性・安全性をアピールするためのカムフラージュの役割を果たしていたに過ぎないと、低く評価した。こうした傾向の研究においては、宗教兄弟団はあまり注目されなかったが、このことは宗教的要素に対する関心の低さに由来していると考えることができる。このような個別研究が一九六〇年代まで主流を占めたのである。

しかし、六〇年代以降のフランスにおける、「ソシアビリティ」概念を用いた宗教兄弟団研究が、ドイツの仲間団体研究にも影響を与えた。これらのフランスにおける諸研究は、ドイツにおいても宗教兄弟団への関心を高め、仲間団体の宗教的要素に再び注意を喚起した。さらに

これまで経済的機能に関心が集中していたツンフト研究や職人団体研究においても、経済的機能以外の多様な機能に関心が向けられることとなった。

そのような流れの中で、ウィルダが百年以上前に提唱した、包括的団体理解という考察方法に再び関心が向けられた。包括的団体理解に関する議論の呼び水となったのは、エクスレによるギルド論であった。³⁾彼は理念型的ギルド像(自発的意思による会員の加入、誓約、会員の平等、独自の法領域の創造、社交的集会などの要素を持つもの)を設定し、中世の諸団体は上述の要素の多寡を伴いつつも、全て「ギルド」という概念に包括されるとした。その後、エクスレの団体理解に触発された研究が、職人団体研究や兄弟団研究に現れてきた。しかし、このような包括的な仲間団体理解に対しては、ツンフト研究や職人団体研究の側からさまざまな批判がなされており、現在に至るまで活発な議論が行なわれている。また、そのような議論に加えて、仲間団体を包括的に理解した場合、あらゆる仲間団体に共通する結合の基盤とはどのようなものなのかという問題が生じる。ウィルダやエクスレが主張するように、その結合の基盤を宗教的要素に求めることができるかということも、現在問題となっている点である。

また、現在の仲間団体研究の焦点の一つとして重要なのが、兄弟団である。兄弟団をめぐっては、その定義、都市内で果たした役割等に関して様々な議論が行なわれてきた。兄弟団の形態および活動内容が、非常に多様で多岐にわたることは、兄弟団を一元的に理解することを困難にしている。兄弟団の定義は、それを指す史料上の用語が不統一

であったり、ギルドやツンフトなど他の仲間団体と活動内容が重複することから、非常に曖昧なものとなっている。また、兄弟団の都市における役割とも関連する、兄弟団と都市の階層構造との関係についても、兄弟団を特定の階層の閉鎖的団体と捉えるか、さまざまな階層を統合する開放的団体と捉えるかで議論がなされている。これらの問題は兄弟団の形態と活動内容における多様性から、一般的な傾向を導き出すのが難しい部分である。しかし、これらの問題は、兄弟団を中世の他の仲間団体との関連で適確に把握するためには、避けて通ることのできないものであるといえる。そしてまた、兄弟団の考察によって、包括的な仲間団体理解に関する議論に対しても、有益な示唆が与えられるだろう。兄弟団は、多様な活動を行ないつつも、あくまで宗教的活動をその中心に据えていた。したがって兄弟団は、包括的団体理解を主張する際に引用される、仲間団体の宗教的要素というものを、最も端的に示しているものと考えられるからである。

本書は著者ベルト・マイスターが一九九九年にベルリン自由大学に提出した博士論文を基に刊行されたもので、ドイツ中世都市における仲間団体を、兄弟団を中心に、その宗教性に焦点を当てて考察したものである。著者は兄弟団を理解するにあたって、エクスレによる包括的団体理解という視点を継承し、それを他の仲間団体から画然と区別するのではなく、同じ基盤の上に成立する類型の一つとして理解することを試みる。そして、それらの共通の基盤をデイルヒャーによって提唱された擬似兄弟的關係 (brüderschaftliche Verhältnis) に求める。⁴⁾この擬似兄弟的關係とは、一定の加入儀礼を行なった諸個人が組み入

れられる擬似血縁関係であり、フェーデの際の援助義務、法廷における援助義務、死者に対する埋葬及び祈祷、団体内の平和維持等の機能を持つとされる。ディルヒャーによれば、この擬似兄弟的關係は、初期中世において失われつつあったジッペの機能を肩代わりするものとして発達し、初期中世の商人ギルド等に受け継がれ、中世を通じて仲間団体の形成上の基盤となっていたという。また、著者はこの擬似兄弟的關係を実際の活動の中で具体的に示すものとして、死者記憶（*over-gedachten*）を重視する。死者記憶とは、同じ社会的結合の中にいる人々が、かつてその結合に属していた故人の靈魂の救済のために、執り成しの祈祷を行なうという行為である。著者はディルヒャーによって提唱された擬似兄弟的關係を、死者記憶という宗教的行為を媒介に成立するものとして設定しようと試みる。そして、中世初期が考察の中心であったエクスレヤディルヒャーによる包括的団体理解の考察方法を、中世後期にまで応用し、実証的考察を試みるのが本書の主なテーマと言える。

著者は以上のような視点に立って、中世後期の仲間団体の宗教的要素を検討していくが、実際の考察においては兄弟団に比重が置かれる。それは典礼や死者記憶ミサなど、仲間団体の宗教的活動に関する記録が、兄弟団においては比較的恵まれていることと、仲間団体の宗教的要素を考察するにあたっての、上述したような兄弟団の重要性に由来している。しかし兄弟団のみが考察の対象となる訳ではない。また、宗教改革直前の都市民の宗教的活動に対する態度はどのようなものであったのか、そして兄弟団は都市の階層構造に対していかなる意義を

持ったのかということも、主要な問題として扱われる。考察対象地域は中世後期にさまざまな仲間団体の活発な活動が見られ、史料状況が他の都市に比して恵まれている、テューリンゲン地方の都市アルテンブルク^⑤であり、考察対象期間は兄弟団が相次いで設立される一五世紀半ばから、宗教改革によって兄弟団が解体され、仲間団体から宗教性を取り除かれる一六世紀初頭までである。また、著者は本論を構成するにあたり、兄弟団をその性格に応じて大きく三つのタイプに分類している。すなわち一、創設上の目的が聖人崇敬など完全に宗教的ことさらに向けられているもの。二、会員以外に対する慈善活動など一定の社会的活動を目的としたもの。三、世俗的特徴を持った団体と結びついたもの、である。手工業者の団体の宗教的側面も三のカテゴリーに含まれるとされる。そして本書の構成は、以上の分類に対応して、以下のようなになる。

- ・序章
- ・第一章、兄弟団とミサ聖祭
- ・第二章、兄弟団と貧民救済
- ・第三章、兄弟団と世俗性
- ・終章

以下、本書の構成にしたがって著者の所説を紹介していく。

一 序章

序章においては、現在までの仲間団体の研究史、著者の研究の鍵概念となる擬似兄弟的關係・死者記憶共同体・カラントの説明、および実証の根拠となる史料の検討が行なわれる。著者は前世紀からの仲間団体研究を振り返り、伝統的な研究が、ギルドやツunftなど特定の仲間団体を個別的に扱うものであったことを指摘している。そして、その傾向に変化をもたらしたものと、七〇年代以降の包括的仲間団体研究の発展をあげる。この間の経緯については上述した通りである。それらの研究の中でも、エクスレによる包括的な団体理解が、ディルヒャーの擬似兄弟的關係論の出発点となり、ひいては著者の観点にも影響を与えているという。また、著者は近年の兄弟団研究の中でも、プリーツェルによる「機関としての兄弟団」と「死者記憶共同体としての兄弟団」の区別という視点に着目し、兄弟団の死者記憶共同体としての側面の重要性を指摘している。⁽⁵⁾

著者の考察の基本となる擬似兄弟的關係については上述した通りであるが、著者は中世後期の兄弟団を、擬似兄弟的關係の弛緩したかたちとして解釈する。その根拠として著者は、中世後期の兄弟団がもはや会員の全生活を束縛することがなく、その他の仲間団体に比して開放的であり、一個人が複数の兄弟団に加入する場合があったことなどをあげている。そのことから著者は、中世後期の兄弟団は弛緩した結合の程度のゆえに、従来擬似兄弟的關係から除外されていた周縁的集團の都市社会への統合を促進させるといふ、兄弟団の統合的機能を示

唆している。

そして、著者が擬似兄弟的關係を具体的に示すものとして重視する死者記憶であるが、実際に考察の対象となるのは、死者記憶の対象となる人々の集團である、死者記憶共同体 (Memorialgemeinschaft) である。死者記憶共同体とは、たいていの兄弟団に付随しており、その構成員は兄弟団の会員による執り成しの祈禱の対象となる。構成員は兄弟団の会員とそれ以外の個人から成り、通常加入希望者は兄弟団への寄進をもって受け容れられた。存命中の加入だけでなく、遺言による財産の遺贈によって死後の加入も可能であった。したがって、構成員には存命している者と、既に死去した者の二種類が存在した。著者は死者記憶と死者記憶共同体を、擬似兄弟的關係を具体的に示すものとして第一にあげる理由として、死者記憶による歴史の共有という点をあげる。すなわち、死者記憶共同体の過去の構成員を、典礼によって記憶することにより、歴史的記憶がもたらされ、故人が関係していた過去の出来事が記憶に留められ、共同体についての歴史的知識が年長者から若者へと受け継がれるという前提が得られるという。そして最終的には、貴族家系の系図上の連続にも似た、共通の歴史に基づく絆が生まれるというのである。そしてこのような死者記憶共同体は、兄弟団以外にも、中世の仲間団体に広範に存在していたという。

また、中世後期の兄弟団を考察するにあたって問題としなければならぬのは、カラントと兄弟団との関係である。カラントとは、従来の研究では、一三世紀以降北ドイツで発達した聖職者による相互扶助団体とされ、俗人兄弟団の起源の一つとも考えられてきた。カラント

と呼ばれる団体は、兄弟団が発達した一五世紀後半においても存在しており、その場合にカラントは聖職者による団体として、あくまで俗人による兄弟団とは区別されて考えられてきた。しかし、このような解釈には、カラントという名称が俗人兄弟団を指す際にも用いられたと考える研究者によって、早くから批判が加えられており、カラントを兄弟団との関連でどう捉えるかをめぐって長い議論が行なわれてきた。著者が研究対象とする中世後期のアルテンブルクにも、カラントと呼ばれた団体が存在しており、著者は具体的な考察に入る前に、カラントに対する著者の見解を明確に述べる必要があるとする。まず、著者は従来のカラント研究が、第一にそれを聖職者による利害保護のための団体と見なし、その兄弟団的特徴（祈祷による相互の靈魂の救済等）を軽視する傾向が強かったこと、第二に中世のさまざまな仲間団体がカラントと呼ばれる場合のあったことが見落とされていたことを指摘する。そして、以上のような点から考慮して、カラントと呼ばれた団体は、聖職者から成る団体だけを指すものではないと結論付けている。

序章の最後で、著者は論証の根拠となるアルテンブルクの兄弟団関係史料の検討と、兄弟団と都市の階層構造との関係の考察において必要となる、都市民の大まかな階層区分を行なっている。通常兄弟団は特定の教会や修道院と結びつくことが多く、兄弟団に関する情報もそれらの史料から得られることが多いが、アルテンブルクにおいては宗教改革によるカトリック教会組織の解体のために、教会関係の史料の残存状況は良好とはいえないという。そのような状況下で著者が主に

依拠するのは、都市参事会によって保管されていた兄弟団設立の認可文書や兄弟団の会計簿等である。また、兄弟団に関連する個人の詳しい情報は、同時期の都市の租税記録と照合することにより得られるとしている。また、アルテンブルクの兄弟団会員の階層区分を可能なものにするために、著者は都市の租税記録の統計的検討から、都市人口の大まかな階層区分を導出している。著者はアルテンブルクの世帯に課された租税の記録から、都市民を上層市民 (bürgerliche Oberschicht)、中間市民 (miteleres Bürgerum)、下層市民 (Kleinbürgerum)、貧民 (Arme) に区分している。しかしこの租税記録が、必ずしも都市の全人口を包摂していたわけではないということを考慮する必要がある。特に貧民については注意が必要で、ここでの貧民とはあくまで租税記録に記入される程度の経済水準の人々であり、そこからは都市の最貧層に属する者たち、すなわち非定住の乞食や浮浪者が除外されていることになる。そして、この二つの貧民のカテゴリ間にも大きな格差が存在した。したがって、租税記録に現れる貧民と、後述する貧民救済活動の対象となったような貧民とを区別して考える必要がある。著者がこの二つのカテゴリを区別することなく „Arme“ という語を用いていることは、問題のある処理といえる。よって本稿ではこれらのカテゴリを区別するために、租税記録に現れる貧民を「課税貧民」、貧民救済の対象となるような最貧層を「貧民」と表すこととする。

二 兄弟団とミサ聖祭

第一章においては、基本的に宗教的活動のみに従事した兄弟団が扱われる。それは、聖体兄弟団 (Fronlehnbruderschaft)、ロザリオ兄弟団 (Rosenkranzbruderschaft)、バルトロメウス教会のアンナ兄弟団 (Annensbruderschaft an der Bartholomäuskirche)、ニコライ教会のアンナ兄弟団 (Annensbruderschaft an der Nikolaikirche) の四つである。これらの兄弟団について、著者は会員構成および死者記憶共同体の成員の構成、そして会員数の推移に注目する。会員構成については、聖体兄弟団についての体系的に把握できるが、その中で課税貧民が比較的高い割合で現れていることが指摘されている。ただし、ここで述べられていることは、会員の中に占める課税貧民の割合 (一一・五%) が都市全体の人口 (あくまで租税記録に現れる限りでの) に占める課税貧民の割合 (一四・六%) に比して決して小さくはないということである。いずれにせよ課税貧民は会員全体の十分の一程度を占めるに過ぎない。著者がこの数字をもって「課税貧民の割合が比較的高い」とするのは少々飛躍があるのではないだろうか。しかしこのことから、課税貧民が会員になる可能性が保証されていたということは確言できるであろう。兄弟団に遺贈等の寄付を行ない、その結果加入できる死者記憶共同体の成員構成については、聖体兄弟団・ロザリオ兄弟団・バルトロメウス教会のアンナ兄弟団の三つにおいて、課税貧民の割合が比較的高かったことが確認されるという。しかしこれらの結論も、上述のように成員に占める割合と都市人口全体に占める割合を比較し

て導き出されたものであり、あくまで相対的なものである。著者はこのように課税貧民の割合が高かったことの背景として、生活基盤が不安定であった貧民においては、より来世における救済への関心が高かったのではないかと推定している。また、バルトロメウス教会のアンナ兄弟団とニコライ教会のアンナ兄弟団においては、遺贈収入が減少する一方で兄弟団の会員数が増加する傾向が見られるという。遺贈収入の減少はこれら四つの兄弟団に共通して見られる傾向である。会員数の増加については、バルトロメウス教会のアンナ兄弟団においては、宴会時のビール購入量の増加から、ニコライ教会のアンナ兄弟団においては、死者記憶ミサの費用として、会員から徴収されていた金の総額の増加から導き出されており、間接的な証拠に基づくものである。著者は、このような遺贈の減少と会員の増加という逆行する傾向が、宗教改革直前の都市民の宗教に対する態度の変化を考える上で、重要な点であると述べている。

三 兄弟団と貧民救済

第二章において著者は、慈善活動をその主な活動内容としていた兄弟団を取りあげる。貧民救済を主体とした慈善活動は、兄弟団の多様な活動の中でも、宗教的活動に次いで広範に普及していたものであり、都市の救済制度の中でそれが担った役割について、活発な議論が行なわれている。兄弟団の慈善活動は、多分に宗教的動機に基づいていた

と考えられている。よってこれらの活動は、仲間団体の宗教的要素の検討という著者の問題関心とも関連する。ここで取り上げられる兄弟団は、史料上ではカラント (Kaland) と表われた慈善兄弟団 (Eiendenbruderschaft) およびヤコブ兄弟団 (Jakobsbruderschaft) の二つである。慈善兄弟団は、史料上ではしばしばカラントと表記されていたが、著者は上述のようなカラントという名称の解釈から、これを聖職者による団体とは見なさず、内部構成の点からも俗人兄弟団であるとして、文章上では一貫して慈善兄弟団 (Eiendenbruderschaft) と記述している。慈善兄弟団の主な貧民救済活動は、毎月一三人の貧民 (課税貧民との差異に注意) に対する食事の提供と年四度の貧民に対する喜捨、そして貧民の埋葬であった。ここで言う貧民とは、兄弟団の史料において *elend* と表される者たちであるが、著者によるとこの言葉は元来「よそ者」を表すものであったが、当時は *arm* と等置されるような「貧しい者」を表す場合にも使われていたという。著者は慈善兄弟団によって初めてアルテンブルクにおける組織的な救済活動が行なわれたと述べるものの、この兄弟団の救済活動が都市の貧民救済全体において、どれ程の価値を有したのかということについては、評価を下していない。史料の少なさが統計的評価を難しくしているものと思われる。むしろ、著者は貧民 (*elend*) の埋葬において、しばしば埋葬される貧民 (*elend*) 自らが、埋葬費用以上の金銭を兄弟団に寄進していた点に注目する。この事実について、著者はこれらの貧民 (*elend*) は実際に無資産であった訳ではなく、通常死者の埋葬を行なうような社会的結合から外れていた者たち、すなわち身寄りの無い独身者であっ

たと推定する。ただし、そのように推定した場合、これらの人々と食事の提供を受けていたような貧民 (彼らもまた *elend* で表されている) とを同列に置くことができるのかという問題が生じる。それに対して著者は、これら二つの集団の間には、経済的には大きな格差があるが、社会的結合から外れていたという点については共通していると考え、ここでの *elend* とは埋葬を担うような社会的結合から外れていた者たちとして同一視得ると述べる。そしてそのような者たち、*elend* を結合の環の中に受け容れる、兄弟団の統合機能を重視するのである。当時の都市には手工業職人を中心として多数の独身者が生活していたが、彼らは通常ツンフトには加われず、職人団体も全ての手工業種について存在していたわけではなかった。すなわち、都市内には社会的結合から外れた者たちの少なからぬ集団が存在したものと考えられ、そのような者たちを包摂する兄弟団の機能が指摘され得るのである。しかし、この兄弟団について残された問題として、救済対象となる貧民の選択基準が不明確な点があげられる。当時の救済活動は、貧困者にあまねく施しを行なっていたわけではなく、一定の基準によって貧民の選別を行なっていた。すなわち、たとえ貧困に陥っていたとしても、不名誉な業に従事しているような者は施しの対象から外されることが多かったのである。どのような者たちに優先的に施しを行なうかは兄弟団毎に異なっており、その選択の基準からその兄弟団の性格が読み取れることも多いのであるが、残念ながらこの慈善兄弟団にはそのような基準を示す史料は伝わっていないようである。

慈善活動をその主な活動内容にしたもう一つの兄弟団としてヤコブ

兄弟団がある。ヤコブ兄弟団は一二世紀以降ヨーロッパに普及した、聖地サンチアゴ・デ・コンポステラへの巡礼行に関連して、巡礼者扶助のために各地の巡礼路上に創設された兄弟団である。アルテンブルクのヤコブ兄弟団も、他地域のヤコブ兄弟団に見られたように、巡礼者に宿を提供するためのヤコブ施療院を経営していた。この兄弟団では、定期金や遺贈による一般的な収入の他に、会員自らが行なう托鉢による収入も大きな比重を占めていたという。托鉢は市壁内だけでなく周辺村落でも広範に行われ、この兄弟団が大きな声望と人気を誇っていたことが見て取れるという。著者はこの兄弟団のように、ミサ聖祭以外の活動を行なうことが、兄弟団にとって少なからぬ財政的メリットがあったことを指摘している。しかし、この兄弟団の慈善活動の中心であるヤコブ施療院の実態については、詳細にはわからないという。特に施療院に収容されたのがどのような人々であったのが不明確である。他地域のヤコブ施療院では、通常収容されるのは巡礼者だけとは限らず、都市の貧民や高齢の独身者などが収容されることが多かった。施療院に収容された人々の階層や社会的地位を検討することによって、その施療院及び兄弟団が都市の救貧活動に果たした役割を考察することが可能になるのだが、アルテンブルクのヤコブ兄弟団については史料上の制約からそのような検討を加えることは難しい。

四 兄弟団と世俗性

第三章で扱われるのは、世俗的な目的を持った仲間団体と宗教性との関わりである。著者の見解では、中世のいかなる仲間団体も、死者記憶を主体とする擬似兄弟的関係をその組織の基盤として持っていた。それは当然ツンフトや職人団体にも当てはまることである。ここで扱われる仲間団体は、いずれも宗教性と世俗性とその内部で結びついていったものである。著者はこれらの仲間団体を扱うことで、宗教組織としての兄弟団的要素と世俗的要素がどのように結びつき得るのかを考察することができるとする。具体的に扱われるのは、射手の団体であるゼバステイアン兄弟団 (Sebastianbruderschaft) と、ツンフト・手工業者兄弟団・職人団体等の手工業者の団体である。

ゼバステイアン兄弟団は都市内の射手によって構成された団体である。中世の諸都市は都市防衛のための武力確保のために、都市内の射手の組織化に大いに関心を持っていた。アルテンブルクにおいても同様に射手の団体が形成されていた。この団体に特徴的であったことは、都市における半ば公的な祝祭団体としての機能と、中世後期に見せた世俗的団体から宗教兄弟団への変化である。射手団体は自らが主催する会食と射撃祭を挙げており、両者とも都市内外の貴族や聖職者の広い参加が見られ、都市参事会が大々的に資金援助を行なうという公的性格を有するものであった。しかし、この兄弟団の性質は一四八〇年頃から変化し始める。まず史料上での名称が従来までの "Sammlung der Schützen", "Gesellschaft der Schützen", "gemeine Schützenschaft" に

いった世俗的性質を示すものから、ゼバスティアン兄弟団 (Sebastian-bruderschaft) という宗教的性質を示すものへと変化する。活動にもバルトロメウス教会へのゼバスティアン祭壇の設置とそでの定期的ミサが加わり、収入源の点でも都市参事会からの補助金の占める割合が次第に低下し、遺贈収入の占める割合が増加している。しかし、そこで著者が強調することは、それによって射手団体の世俗性と祝祭的機能が失われたわけではなく、世俗性と宗教性が同程度に表出しているような二面性を纏うことになったという点である。

通常その経済的機能に着目される手工業者の団体においても、著者はその内部の宗教的要素を重視する。そして、これらの団体における宗教的要素とはどのようなものであったのか、そして、宗教的要素はこれらの団体の中でどれ程の意義を有したのか、ということが考察されねばならないという。中世後期のアルテンブルクには、パン屋ツンフト、肉屋ツンフト、靴屋ツンフト、鍛冶屋ツンフト、樽屋ツンフト、仕立屋ツンフト、毛織物工ツンフト、麻織物工ツンフト、およびパン焼き職人団体、樽製造工職人団体、靴工職人団体が存在していた。アルテンブルクのツンフトに広く見られた宗教的活動は、死者記憶と会員の埋葬である。著者は相互的な死者記憶が団体形成の基本的基盤となるという自己の見解に基づき、死者記憶はツンフトの団結と帰属意識に少なからぬ役割を果たしたのではないかと述べる。職人団体についてもツンフトと同様の宗教的活動を行っていたが、著者がそれらの中で注目するのはパン焼き職人団体である。この団体において注目すべきことは、この団体がその団体規約の中で、「組合 (Gesellschaft)」

と「兄弟団 (Bruderschaft)」という二通りの名称で表されていることである。二つの名称の使い分けには微妙なニュアンスの違いがあるという。団体の死者記憶共同体に関わる部分、すなわち擬似兄弟的關係に関わる場合には「兄弟団」が用いられ、それ以外の場合には「組合」が用いられている。著者はこの名称の使い分けの中に、「兄弟団」という名称の本質的意味、すなわち死者記憶を通じた擬似兄弟的關係が鮮明に表われていると指摘するのである。

五 終章

以上のような本論を踏まえて、終章において著者は、自身が設定した問題についての結論を述べる。それらの問題とは、仲間団体の結合の基盤としての死者記憶すなわち擬似兄弟的關係の意義、また仲間団体の宗教的活動から都市民の宗教活動に対するいかなる態度が読み取れるかという問題、そして兄弟団は都市の階層構造に対していかなる役割を果たしたのかという問題である。

第一に著者は中世後期のアルテンブルクの仲間団体は、全て宗教的要素を有しており、その中でも全てに共通する活動として死者記憶が見られたことを指摘する。そして、団体形成における死者記憶の重要性を再確認する。すなわち、相互的死者記憶は存命している会員の結合を強固なものにし、個々人と故人を結びつけ、それによって個々人を、世代を越えた人的結合の中に位置付ける。こうして死者記憶は擬

似血縁関係、すなわち擬似兄弟的關係を生じさせるとする。そして、この擬似兄弟的關係が諸個人の結合を創出し、強化し、世代を越えて維持する手段となつたとし、団体形成における手段としての重要性を強調している。さらに、宗教兄弟団においては、死者記憶が全ての活動の前提となっており、貧民救済などのその他の活動は、死者記憶が安定して行なわれるという条件をクリアして初めて追求され得たとする。また、こうした死者記憶というのは、来世における救済の保証という側面を強く持っていた。著者が本書の題名に「Religious Engagement」という言葉を用いていることが、死者記憶のそのような側面を象徴的に表している。すなわち人々が、財産の寄進や祈禱といった、自らの意志的・実践的行為を通じて、来世における自己の救済を確固たるものにするという死者記憶のあり方が、「アンガージメント・エンゲージメント」(個人が意志的・実践的行為を通じて、将来の希望する自己の実現に向けて、自らを拘束していくこと)という言葉によって象徴されているのである。しかし、個人の意志の力と自己責任という側面が強調されるこの言葉を、宗教的なことがらに用いることについては議論が分かれるところであろう。

第二に著者は都市民の宗教活動に対する態度と関連して、バルトロメウス教会のアンナ兄弟団、およびニコライ教会のアンナ兄弟団に見られた傾向に着目する。この二つの兄弟団の遺贈による収入は、宗教改革直前の数十年間において減少し続けた。その一方で宗教改革に至るまで両兄弟団の実会員数は増加を続けたという。また同時期、遺贈収入の減少は、他の兄弟団にも共通して見られ、ロザリオ兄弟団とバ

ルトロメウス教会のアンナ兄弟団に至っては、破産寸前の状況にまで追い込まれていたという。これらの状況や免罪符の販売に対する反発などの傾向も考慮して、著者はアルテンブルクの住民達の中に、遺贈による救済の確保、すなわち宗教実践の購入を嫌い、兄弟団の会員となり積極的に宗教活動に関与することを好む意識が生じたのではないかと推論する。このような意識は其後の宗教改革の中でも存在し続けたとし、兄弟団に生じたこの状況の中に、宗教改革の前兆を見出すとするのである。しかし、著者自身も認めるように、当時のアルテンブルクにおいては、兄弟団が財産遺贈の対象となるような唯一の組織であった訳ではなかったので、兄弟団への遺贈の減少のみから、都市民の遺贈に対する意欲の減退を述べることには慎重にならなければならない。また、両アンナ兄弟団における会員数の増加にしても、いずれも間接的な証拠に基づくものであり、その他の可能性も考慮する必要があるところであろう。

第三に兄弟団と都市の階層構造との関係については、兄弟団に対する遺贈者の社会構成の検討から推論が行われる。著者によると、遺贈主体の社会構成を検討すると、人数の点では上層市民・中間市民が多かったものの、課税貧民もその人口に占める割合と比較すると、少なからぬ数が遺贈を行っていたという。また、遺贈を行っていた記録があるものの、租税記録に名前が見出されない個人も存在した。彼らが市外居住者か課税を免除された貧民であった可能性を考慮すると、貧民の割合は更に増えるのではないかと推論されている。また、課税貧民による遺贈額は、より上の階層に比して決して少なくはなかった

という。これらの点から著者はアルテンブルクの課税貧民の、兄弟団への遺贈に対する高い関心を推定する。宗教兄弟団は来世における救済への高い関心を持ちつつも、従来その関心を充足させるような死者記憶を行なう社会的結合から除外されていた者たちに対して、格好の遺贈先を提供したという。そして課税貧民層も含め、広範な階層を包摂した兄弟団の開放的性格が指摘されるとするのである。

おわりに

最後に本書の意義と課題を、本稿筆者の問題関心と関連させて指摘しておきたいと思う。第一に本書の意義は、エクスレ以来の包括的な仲間団体理解に関わる議論の中で、包括的団体理解を支持する立場に立ち、中世の仲間団体をデイルヒヤーの擬似兄弟的關係論の視点に立って理解した点、および中世後期における仲間団体の結合の基盤を、擬似兄弟的關係を具現する宗教的活動である死者記憶に求め、一つの中世都市を対象を絞って実証的考察を試みた点にある。中世の仲間団体と擬似兄弟的關係の密接な結びつきは、上述のパン焼き職人の規約における団体名称の使い分けに鮮明に表われているであろう。また、本書の題名に引用されている、*„Sie sollen bruderschaft halden“*（汝らは兄弟の如き関係を結ばねばならない）⁷⁾というパン焼き職人団体規約の一節にも、この密接な結びつきが見られる。著者の見地からすれば、例えば世俗的目的を持った団体であっても、人と人とを結びつける基盤に

なっていたのは、この *„bruderschaft“* という言葉に象徴される擬似兄弟的關係であるということになるであろう。また、この一節の現れる箇所が死者記憶に触れている部分であることから、*„bruderschaft“*（兄弟の如き関係、すなわち擬似兄弟的關係）が死者記憶と不可分に結びつくことを象徴しているであろう。

第二に兄弟団の本質を死者記憶に求めた点も重要である。従来あまり重視されてこなかった死者記憶、及び遺贈を通して広範な社会階層を包含した死者記憶共同体に着目することにより、兄弟団の開放的・階層超越的性格が強調されることになる。このような理解は、兄弟団をエリートของตัวเอง表現手段と見なし、中・上層市民の閉鎖的団体という側面を重視するレムリンクなどの兄弟団理解と一線を画するものである⁸⁾。また、兄弟団における下級聖職者と俗人の共存関係に注目し、兄弟団の身分統合的機能を重視したクルツェなどの見解に沿いつつ、そのような機能を都市全体の階層構造にも適用した点が評価されるべきであろう⁹⁾。

また本書の課題としては、以下の点があげられる。第一に著者は、死者記憶及び死者記憶共同体の意義を強調するものの、実際に兄弟団の会員になることの意義については殆ど言及していない。著者の言うように、兄弟団の本質を死者記憶に求め、遺贈者又は寄進者から構成される死者記憶共同体の活動を兄弟団の前提とすると、実際に会員になることおよび会員によって為される活動は付加的な意義しか持たないことになる。兄弟団の中で、実際の会員によって為される活動と死者記憶共同体の活動とがいかなるバランスでもって存在していたのか

ということ、本書においては未解決であり、今後の課題と言える。第二に兄弟団の開放的性格にしても、これはあくまで死者記憶共同体の構成から導出されたものであり、実際の会員における階層構成を詳細に検討しなければ、兄弟団一般の性格とすることはできないであろう。著者は史料の不足のためアルテンブルクの兄弟団の会員構成に対する統計的分析は難しいとしているために、他地域における更なる実証的な比較検討が必要である。第三に著者の提示する実証的根拠の解釈については少々飛躍が見られる。特に聖体兄弟団の会員構成における課税貧民の高い割合や、兄弟団に対する遺贈数の減少および両アナ兄弟団における会員数の増加などは、明確な結論を下すには実証的根拠が不足しているように思われる。第四に著者が依拠するような、包括的な団体理解という考察方法が、未だに活発な議論の対象となっているものであり、多くの問題が存在するということにも留意しなければならない。

ただし、以上のような課題が存在しつつも、従来まで等閑視されてきた兄弟団の死者記憶共同体の役割に注意を喚起し、兄弟団の理解に対して新たな視点を提示したという本書の意義は評価されなければならないだろう。

註

- (1) Wilhelm Eduard Wilda, *Das Gildenwesen im Mittelalter*, Halle 1831.
 (2) Otto von Gierke, *Rechtsgeschichte der deutschen Genossenschaft*, Berlin 1868.

- (3) Otto Gerhard Oexle, *Die mittelalterlichen Gilden. Ihre Selbstdeutung und ihr Beitrag zur Formung sozialer Strukturen*, in: *Soziale Ordnungen im Selbstverständnis des Mittelalters*, Bd. 1, hg. v. Albert Zimmermann, Sigmaringen 1979.

- (4) Gerhard Dicher, *Die genossenschaftliche Struktur von Gilden und Zünften*, in: *Gilden und Zünfte. Kaufmännische und gewerbliche Genossenschaften im frühen und hohen Mittelalter*, hg. v. Berent Schwinköper, Sigmaringen 1985.

- (5) ここで、本書の考察対象となる都市アルテンブルクについて若干の説明を行なう。アルテンブルクはライプツィヒの南方約五〇キロメートル、ツヴィッカウの北方約五〇キロメートルの地点に位置する。都市の起源は、八〇〇年頃に存在していたスラヴ人の居住地である。九七六年にはオットー一世がブルクを築き、一一三二年にはロータル三世が当地で宮廷会議を開いている。その頃には市場が形成されていたようである。その後フリードリヒ・バルバロッサは、アルテンブルクを帝国領国であるプライセンラントの中心地にしようとして計画し、大規模な都市の拡張を行った。この時点で中世後期におけるのとはほぼ同様の都市の姿が出来上がった。都市には王宮が置かれ、フリードリヒ二世も計三回アルテンブルクに滞在している。都市には、国王の役人たちが多く住み、彼らが実質的な都市の支配層を形成していたようである。しかし、一三世紀後半に入り、プライセンラントがヴェッティン家のマイセン辺境伯に質入れされるに及んで、アルテンブルクもヴェッティン家の支配下に入る。ルードルフ・フォン・ハプスブルクの治世に、一時帝国領への回収が試みられるも結局実を結ばず、その後は一貫してヴェッティン家の支配に服する。一三世紀後半の都市参事会の形成以来、基本的に門閥支配型の都市であったが、一四三二年にはツンフト闘争が発生している。ツンフト闘争は、マイセン辺境伯ヴィルヘルム・デア・ライヒェンの仲裁により収束したが、結局ツンフト支配が打ち立てられるこ

とはなかった。一四八五年のヴェッティン家の分裂後は、エルネスト系のザクセン選帝侯領に属した。都市は南北二つの小教区から成り、北部はバルトロメウス教会、南部はニコライ教会を教区教会とした。都市内にはドイツ騎士修道会管区、フランシスコ会修道院、マグダラ修道院が存在し、市壁外に通常「ベルガー修道院」と呼ばれていたアウグスティノ会修道院、ゲオルク修道院が存在していた。本書の考察対象期間におけるアルテンブルクの人口は、概算で三〇〇〇〜四〇〇〇人と考えられる。一五二一年には宗教改革が導入される。その後一時アルプレヒト系ヴェッティン家のザクセン選帝侯領の一部となるが、すぐにエルネスト系の支配下に復帰し、一七世紀初頭からはザクセン・アルテンブルク侯領の首府となった。本注については、Handbuch der historischen Stätten Deutschlands, Bd. 9 Thüringen, hg. v. Hans Patze, Stuttgart 1968, S.7-10.

紹介

(9) Malte Priezel, Die Kalende im südlichen Niedersachsen. Zur Entstehung und Entwicklung von Priesterbruderschaften im Spätmittelalter, Göttingen 1995.

(7) この一節は、規約の認可者である都市参事会が、パン焼き職人たちに語りかけるかたちをとっている。この箇所については、本文中のような解釈の他に、別の解釈も考えられる。それは「汝らは兄弟の如き関係を結ぶこととなる」というように、必然的事実を客観的に述べているとする解釈である。しかしこの一節のみから結論を下すのは難しい。著者もこの点については明確な解釈を提示していないので、ここでは上述の二つの可能性を示すに留める。

(8) Ludwig Renling, Sozialgeschichtliche Aspekte des spätmittelalterlichen Bruderschaftswesens in Franken, in: Einungen und Bruderschaften in der spätmittelalterlichen Stadt, hg. v. Peter Johaneke, Köln/Weimar/Wien 1993.

(6) Dietrich Kurze, Die niedere Klerus in der sozialen Welt des späteren Mittelalters, in: Beiträge zur Wirtschafts- und Sozialgeschichte des